〈青森県史〉の窓 186

八戸タワー
～工都八戸市の宣伝塔～

中園　裕
（県民生活文化課文化・NPO活動支援グループ〈県史担当〉主幹）

「八戸タワー」と聞いて懐かしさを感じる八戸市民は多い。しかし、知らない世代が増えたのも事実だ。1958（昭和33）年にできた八戸遊園地の観光展望塔のことである。

長根リンク（長根堤）から見た八戸タワー
＝1959（昭和34）年頃・青森県所蔵県史編さん資料

建設を主導した八戸観光株式会社社長の熊谷義雄は、八戸商工会議所の会頭でもあった。彼は八戸市を中心とする観光事業推進の第一弾として、市の中心街に近い稲荷町へ八戸遊園地を建設した。東北地方有数の工業地帯を有していながら、市内には働く人たちが休日を過ごす場所がなく、子どもたちの遊び場がなかったからだ。

遊園地は市民の憩いの場だった長根公園に隣接していた。子ども連れの家族が出かけるには好都合の場所だった。回転ブランコ、オクトパス、メリーゴーランド、豆電車、回転ボートなどの遊具は、野原や道端で遊んでいた子どもたちを夢中にさせた。

八戸タワーは完成当時「東北一」と称された。日本で最初にできたタワー（集約電波塔）は、1954（昭和29）年6月に完成した名古屋テレビ塔である。3年後の8月、さっぽろテレビ塔が完成した。

熊谷たちは北海道博覧会に乗じて建設中だったさっぽろテレビ塔を見学し、八戸タワーの建設を決めた。1958（昭和33）年10月に完成したタワーは、東京タワーより2ヶ月も早くお目見えした。

330メートルを超える東京タワーに比べ、八戸タワーは70メートルあまり。5分の1程度の大きさだった。しかし二つの展望台を設け、下の展望台にはレストランを併設し、上の展望台には望遠鏡を設置した。地上と展望台の間には20人乗りのエレベーターが常時運転されていた。

タワーからは中心市街地の雑踏をはじめ、遠くに臨海工業地帯や高館の自衛隊基地、鮫漁港や蕪島も見渡せた。発展する市街地や臨海工業地帯を内外に知らせる上で、タワーは大いに宣伝効果を発揮した。「工都」八戸市を内外に知らせる宣伝塔でもあったのだ。

1968（昭和43）年5月、十勝沖地震でタワー最上部が破損した。しばらくの間は最上部を撤去して営業を続けたが、老朽化のため1976（昭和51）年に撤去。跡地には八戸市弓道場が建てられた。

1981（昭和56）年、市郊外の十日市に「こどもの国」が誕生した。郊外の新しく大きな遊園地には、自動車で繰り出す家族が多数集まった。古く小さかった八戸遊園地は見劣りするようになった。

こうして八戸遊園地は1985（昭和60）年に閉園となり、遊具は撤去された。開園当時に小学生だった人たちは親世代となり、こどもの国や郊外のショッピングセンターへ子どもを連れて行くようになっていた。1997（平成9）年、こどもの国は植物園と統合してできた八戸公園の一部となった。

工都八戸市の発展を象徴した八戸タワーがなくなって半世紀近い時が経過した。現代社会に多大な影響を与えた高度経済成長も、歴史的検証が可能となった。タワーがあった時代から何を学び、何を感じ取るのか。当時を知る人たちとともに考えていきたい。